

直観と体験の総合

—ゲーテの科学，芸術，哲学—

渡 邊 直 樹

はじめに

「私は、思弁ということについて考えたことはなかった。本質的な意味で、私は哲学的能力は持ち合わせていなかった」⁽¹⁾とゲーテは自らを回顧したが、一方、哲学的尺度をもってゲーテの創作活動の意義と方向を規定しようと試みた同時代の人も多くいた。シラーも、イギリス人カーライルも、ゲーテの思索をこの哲学的観点をもって認識しようとした。シラーは1794年のゲーテの誕生日に送った書簡において「あなたは、自然の中の必然的なものを、それを最も困難な道の上に求めています。・・・個別的なものを知るために自然全体をひとまとめに捉えようとしています」⁽²⁾と述べ、ゲーテの自然科学を「合理的体験論」という含みのある表現で性格付けている。またカーライルは、「人間の永遠なる理性を、人間の目に見える公式を用い具体化しようとした」⁽³⁾と語り、ゲーテの芸術的創造をあえて哲学的思索の実践の結果として理解しようとする姿勢を示している。

ゲーテが時代の哲学思想の枠内に自己の創作姿勢が定式化されることを拒否し、逆にシラー、カーライルらがそこに当てはめて、自己定義を試み、そして同時代の人々をもこの基準をもって評価しようとしたこととの間の思考形式の相違の原因はどこに求められるべきであろうか。

本稿では、とりわけデカルト、ニュートンらの分析的、機械論的自然科学とは対立するゲーテの観察的経験的自然科学と自然観とを主要な考察対象としてこの問題の本質に迫ろう。なぜならば、機械論的あるいは伝統的思弁的哲学における自然認識とは異なる方法論をもって、ゲーテは自然世界全体の新たな体系化を試みようとしたからであり、何よりもこの思考方法こそ近代科学の死角であったゲーテ固有の「科学」の一面を提示するものとみなし得るからである。

(1) 自然と芸術

ゲーテに本来備わっていた基本的な才能あるいは気性は、決してドイツ人固有の伝統的で思弁的なそれではなく、むしろ彼独自の自然に対する観察と生活の方法、つまり実際の体験により適合する性向を有していた。ゲーテの告白によれば、思弁的な理論を客観的に受け入れるための「いかなる器官」ももっていなかったのである。しかしながら、このことは、ゲーテにそれを理解する能力がなかった、ということの意味するものではない。ゲーテは、生来有する芸術家的資質をもって自身の世界観のうちでそれらを再構成し、再受容する能力を備えていた。彼を取り巻く自然や、精神世界全体の普遍的法則や規準を、現実に取り寄せて自己のものとして把握する術を心得ていたのである。これこそ、自己自身の中で、あるいは世界の中で自己自身を感知しうる自立的認識方法に他ならなかった。そして、人間存在と自然との関係を追究する過程において、哲学者や思想家と自己とを対比する精神において、必然的に異同が明白となってきた。折りにふれヤコービに書いたように、ゲーテにとって、哲学とは私たちが自然と一体化したかのような根本的な感覚を高め、保障し、それを敬虔で静かなる生活において深く直観させるべきものでなければならない。⁽⁴⁾それ故にゲーテは、自然と精神とを二律背反的關係において捉えようとする哲学とは対立したのである。この点においてすでに、ゲーテの当時の哲学に対する批判的考察と、ゲーテ的哲学の基本が見て取られる。事物に関する認識と把握の方法からは彼の自然観が、認識の本質、意義、範囲からは精神世界が、そしてその総合としてのゲーテの哲学的世界観からは、文学、美学、倫理学、哲学、瞑想などとの包括的關係が明らかになってくる。

認識における直観が空想的、感情的であるとすれば、概念的思考は抽象的、論争的反省が基礎となる。一般にはこの相対立する認識機能が、一方が他方に優勢であったり、互いに抑止的に作用することが普通である。自然現象と精神的実態から思考の枠組みを獲得し、それを同時に世界を構成する諸要素からなる具体的なものとして、芸術的に完成されたものとして眼前に、それも曇りなき方法で現出せしめるという点でゲーテほどの才能の持ち主は存在しなかった。古代のプラトン、アウグスティヌスにしろ、近代のショウペンハウエル、R・ヴァグナーにしろ、両者の接近は認められるにしてもその融合に至ることはむしろかかった。

このゲーテ特有の精神構造は、感覚的直観から精神的観察へと導く過程において発揮されるものであった。エッカーマンに語ったところによれば、絵画にはそれを表現するため

の内的衝動である「ある種の差し迫った力、力強い感覚」⁽⁵⁾が必要であると。問題の抽象的把握から血の通った生命力をもつ、目にみえる事物へと具体化すること、換言すれば詩的に芸術的に表現する能力を、ゲーテは自ら本来的に有している、ことを知っていた。

ゲーテの本性に根ざすこうした独創性は、直観と概念的思考との均衡の上に成り立つものであった。形而上学者にとっては、所与の感覚的、直観的關係から普遍的、抽象的命題、思索へと至ることが重要であり、この思考形式はアプリアリな理性を前提し、これにより純粹に概念的で、非直観的思考へと至るものである。人間の心の本来の欲求であるとか、事物の目にみえる關係からではなく、思考の思弁的な方法によって理性的に抽象的概念から因果關係を推定するか、あるいは存在の可能性と必然性に対するより抽象的思考の關係から發展させられるものである。神も自然も、哲学者の純粹な目には、一つの統一的全体を構成する個別的な力の關係から成立しているのではなく、世界の始まりから神によって与えられ互いに適合した、予定調和内に理由づけられるものであった。Dr.ハインロートが後にゲーテの思考形式を「対象的」と述べたとき、ゲーテはそれに応じて「私の思考は対象から分離するのではなく、直観が思考の中に入り込むことによって対象の諸要素が最奥まで貫かれるのである。私の直観そのものが思考であり、思考が直観である」⁽⁶⁾と分析してみせた。さらに具体的に「精神の眼は、肉体の眼と絶えず生きた關係をもち作用し合わなければならない。なぜならば、さもないと見たとしても見落とす危険があるからだ」⁽⁷⁾と語っている。

むしろ思弁の性向を有していたシラーは、このことからゲーテの自然科学的方法的特質を容易に理解することができた。「単純な有機体から、あなたは一步一步ますます複雑なそれへと立ち向かい、最終的にはあらゆるもののうちで最も複雑なもの、人間を自然全体を構成する素材から発生学的に造りだそうとしています。人間をいわば自然に従って造り変えることによって、あなたはその隠された技術に迫ろうとしています」⁽⁸⁾と。「生じたものを見、その際、その諸段階において感知したもの全ての中にこの継続的な形成過程を見透すことを要求しようとする」⁽⁹⁾姿勢、つまり事物の概念及びその説明の発生学的方法は、終始一貫、ゲーテ特有の思考形式であった。これに至るためには、悟性を働かせ、現象の原因について仮説を立てるのではなく、その原因を精神的に認識すること、内的必然性に基づく関連ある事実証拠を積み重ねることが必要であった。ゲーテがニュートンの白い光の屈折に関する仮説に対し、色彩感覚の理論で反証したのもこの方法論の相違にその根源を求めることができるのである。地質学における火山論も同様である。ある現象から

別の現象への移行を帰納的にあるいはアナロジーに基づいて推測することは、決して規則性や固定性を発見することにはならず、偶然や無関係の出来事を過大に評価しているに過ぎないと。『ファウスト第2部』(Doktor Faust, 1826-32)においても火成論を否定している。

黄泉の王プルートの恐ろしい火や、風の神エオルスガスの爆発力が猛烈に、
平らな地面の古い皮を突き破ったので、新しい山がたちまち出来上がらずに
はいかなかったのだ。⁽¹⁰⁾

ゲーテは、地層が長い時間をかけて段階的に成立する過程を明示するものとして水成論を支持した。「私の観察によれば、大地は己自身から己を造り上げたのである」と。⁽¹¹⁾

ゲーテは、また芸術と自然とを異なる方法で観察しようとはしなかった。現実を構成するものの概念とその感覚的直観との融合において、初めて芸術は作品として完成されるものであると信じるからであり、また「悟性的理性の高み」に依拠すると思われる科学も、「それなしには本来いかなる芸術についても考えられない感覚的空想力」⁽¹²⁾の介在が意義を持っていると信じるからである。例えば、植物のように、組織の実態と成長段階の時間的経過とを感覚的直観的にまた全体的に把握できないように。常に感覚的多様性を直観することによって、本質的で規則的な特徴が導き出されるわけではないにしても、真実の認識においてはその精神作用が大きな比重を占めなければならないからである。また神の真理も、「けっして直接私たちには認識され得ない。私たちはそれを、例えば個別的で関連ある象徴のうちに、ただその反映のうちにのみ認めることができる」⁽¹³⁾のであり、その真実を把握する諸段階は、認識するその人自身のうちにあると考えられるのである。確かに真実とか客観性は、主観性に従って表明されるものであるとしても、先達の業績に自己のそれを付加する術を心得ている限りにおいて、つまり「歴史的なものに生産的なものを結合させる」⁽¹⁴⁾限りにおいて、その判断は完全なる真理を把握することができるのである。自然研究におけるゲーテ独自の姿勢は、こうした思考形式から生まれてきたのである。「自然は常にある問題を隠している。」⁽¹⁵⁾それに接近するには「全体に対して一つの理念が基礎にある」と考えなければならない。「それに従って神は自然のうちに、自然は神のうちに永遠から永遠を創造し、影響を与えることができるように。」⁽¹⁶⁾直観、観察、追思考は隠された自然の秘密へと導く基本的条件なのである。ゲーテが、人間と「自然」とは

一体である、と確信するとき、人間は、無限と有限との間の溝、理念と体験との間の不整合を「理性や悟性、想像力、信仰、感情、妄想や虚言で克服する」ことはできない、⁽¹⁷⁾ということの意味しているのである。

(2) 自然科学研究の方法

ゲーテの直観的自然把握の特質は、一方また経験的認識と合理的認識という18世紀の認識論的対立の構図をも浮き彫りにするものである。経験主義にとって、認識とは、ある決まった普遍的法則によって、明確に関連するものとして客観的に表現され得るものであり、理性によって感知された事実から普遍的関係や概念を導き出そうとする。従って、客観的で普遍妥当的科学的認識の外にあるものを、個人のある主観的欲求の超越的内容とともに認知しようとするものである。

しかしながら、これに対して認識理論的、形而上的合理主義は、事物とその関係とを思考がいわば後から内実を付与するものとして捉えることができずに、経験的偶然性を内包する感覚的な、あるいは原因と結果の概念から思考の必然性という抽象的性格を持つことになる。認識の明瞭性は事物の関係ではなく、普遍的概念の関係を有する必然性のうちにある。従って、客観性は観念と思考の内容としてみなされ、概念であるとか把握の方法、判断などは体験に先んじてアプリアリに理性のうちにあることになる。それ故に感覚的体験は、形而上的合理主義にとって真実の明確な認識の根源とはならず、理性そのもののうちにあらかじめ存在する普遍的概念及び命題に他ならないのである。

ゲーテは、自然の研究を眼に見えるものに限定する限りにおいては経験主義と一致した。しかしながら、理念に対してただ盲目的に反対したのではない。「眼に見えないものを認め、認識しようとすることを経験主義者が全く否定する」⁽¹⁸⁾という傾向にはそのまま同意しない。ゲーテは、現実の具体的関連が思考において捉えられる本質の現れである、という点においては合理的、形而上的思考形式と一致していた。しかしながら、この本質を認識する方法は、形而上学者のそれとは異なるものであった。純粹思考、蓋然性や現実などの概念からの推測などは、彼にとって意味のないものであった。ゲーテは、経験主義に対しては、現実が感覚的に感知し得る事物の関連のうちではなく、それについて考えるべき理念のうちに認められる限り合理的に考えようとしたし、一方形而上的合理主義にたいしては、感覚的なものの背後に、あるいはそれを越えて非感覚的な世界を考え、状況というものを「純粹理性的概念」ではなく、アナロジーと感覚的に与えられたものに基づき解明し

ようとしたのである。事物の本質の認識に関するこの両者の対立を克服しようとしたという意味で、ゲーテはむしろカントと接点を有していたといえよう。⁽¹⁹⁾カントにとっても思考と観察との相互作用なしにはいかなる認識も存在しなかったし、この二つの融合は、彼の見解では体験の領域においてのみ見出されるものであった。彼の理論によれば、私たちの認識はすべて体験とともに始まるのである。しかしながら、体験からのみ生まれるものもない。体験の内実とは、感覚や感知によって跡付けられるものではなく、普遍妥当性と必然性を通してのみ得られるもので、感覚的内実を通じた観念の素材が意識のうちにあらかじめ準備されている機能によって捉えられ、形式化され、それにより初めて必然的に思考されるべきものの性格が与えられるのである。

ゲーテは、認識の本質については自然観における象徴の概念が妥当する限りにおいてカントと一致した。体験とはカント同様、超感覚的現存在を、感覚的観察において感知する主体に対して、客観的にいかに表現するかであり、この理念の「象徴的」表現法は、事実、カントの概念のアナロジーであるといえよう。この象徴的認識の完全性には、事物そのものと現象との相違を、理念と体験との対立によって置き換えることができる。これには、あいまいで様々な段階があるが、理念の本質を完全に自己のものとするために限界があるわけではなく、体験に基づいた象徴の独自性が合目的性に深く関われば、それだけ理念の本質の把握が可能となる。一方カントにとって、体験の領域において絶えず前進する認識の本質とは、常に把握できないままでなければならないのである。物それ自体は、カントによれば本質に基づくもので、認識において客体は完全に主体のうちにももの自体としてではなく、現象として表現される。主観はいわば内面化され、客体の中に沈潜する。それに対してゲーテは「主体にある全ては客体のうちにあり、それ以上のものである。客体にある全ては、主体のうちにあり、またそれ以上のものである」と考える。⁽²⁰⁾

確かに事物の認識における両者の基本的立場は異なっているように思われるが、アナロジー的方法においてゲーテの自然認識とカントの『判断力批判』(Kritik der Urteilskraft, 1789)における美学的、目的論的認識は関連があるように思われる。カントの有機体についての見解が、ゲーテの現象に対する理念の関係についてのそれと、どの程度一致しているか、を確認することは困難であるが、この問題は美と自然の中の有機体に関して、人間の精神に基本的に備わっている認識と判断を検討することによってある程度明確になるはずである。カントは、アリストテレス的命題に従い、有機体は部分から構成され自然の事物も同様である、と考える。有機体の各々の部分は、その性質と機能が有機体の全体的機

能と本質により初めて全体として、またそのように条件付けられている。この全体と部分の交換関係に有機体の合目的性があり、その科学的認識にとっての人間の利益に対する寄与は考慮されることはない。この関係に生命の最も普遍的特性が現われている。合目的性の種類を決定し、それによって部分を互いに機能しあうようにすることによって、有機体を把握できるし、たとえ外に向かつての「象徴」においてであろうと、その理念と形を具体的に理解できるのである。しかしながら、カントにおいては、全体と部分との条件関係から成り立つ有機体の合目的性は、現象以外のものではなく、体験は制限されている。

ゲーテにとってこの関係は、理念を理解するというよりも本質、物自体を現象の包みを通して見透すことにあった。⁽²¹⁾このゲーテの認識の範囲と本質に関する見解は、自然科学的手続きの方法に現れており、主に分析と統合という相反する二つの特徴的考察に見て取ることができる。前者は、部分の組成と性質から全体の本質を探る方法であり、後者は、あらかじめ前提された全体の特殊な本質から部分の関係と影響の在り方を導き出そうとするものである。ゲーテはこのことを「私たちが現象として出会うものは、統合されるべきものの根本的分裂か、分裂にいたるべきものの根本的統合かのどちらかで・・・統合されたものを分裂させ、分裂したものを統合させることは、自然の生命であり、これは永遠なる呼気と吸気であり、・・・私たちが生きる世界の呼吸であり、営みである」⁽²²⁾と述べているが、このことはまた、とりも直さず方法論的対称である帰納と演繹、観察と理論、体験と理念の関係の拡大と深化に他ならないであろう。しかしながら、ゲーテは、当然、統合的方法論に依って立つ。単なる分析と区別は平行的関係概念なしには、なんら説明したことにはならないからである。「全体の現存在が永遠なる分裂と結合であるならば、人間も大きく考えれば分裂したり、結合したりすることになろう」⁽²³⁾と。理念や概念は観察を基礎とし、体験を促進し、事実発見や創造を与えるものである。とりわけ、生物の組織の考察において、ゲーテはこの方法論の正しさを確信するに至る。「生き物以上に高度な統合とはなんであろうか」と。⁽²⁴⁾後に動物の本質についてのキュヴィエとジョフロア・デュ・サントイレールとの間の論争において、ゲーテは後者の統合論者の側に与する。つまり「前者は個別的なものから全体に入り、その全体は前提されるが決して認識可能なものとしては考察されない。後者は全体を内的な意味で捉え、個別的なものはそこから徐々に展開され得るという確信のうちにあり」と。⁽²⁵⁾自然という対象を扱う彼の方法は「全体から個へ、全体の印象から個々の観察へ」と向かい、やがて生物学における当時の主流である観相学を経て彼独自の形態学的解明方法を確立するに至るのである。

ともあれ、ゲーテのこの方法論は、彼の自然観の基礎を形成するものであると同時にその固有の精神の有り様をも明示するものである。「大いなる法則を感知すること、それは常に天才的な精神作用であり、直観によってそこに至るのであって、追思考や理論や伝統によるものではない。」⁽²⁶⁾ゲーテはこの働きを *Aperçu* と呼んだが、「このようなアペルシュこそ、その発見者に最高の喜びを与える」⁽²⁷⁾ものであった。「自然は、注意深い観察者の眼前にさらされることのない、いかなる秘密も有することはない。」⁽²⁸⁾つまり「世界と精神の統合こそ、現存在の永遠なる調和に関して最も幸福なる保障をあたえるものである」と。⁽²⁹⁾言わば、精神の眼に映る直観がゲーテにおいては、自然一般、植物、動物そして人間の組織と成長、事物の認識にとって決定的なものとなるのである。シラーが、ゲーテとの対話で原植物についての話しに及んだとき「それは、体験ではなく、理念でしょう」と述べたことに対し、ゲーテが「それと知らずに理念をもち、それを眼でさえ見ることができるとするのは、なんと好ましいことでしょう」⁽³⁰⁾と応じたという逸話は、ゲーテの統合的視点、精神的直観、アペルシュの内実を的確に言い表しているといえよう。

(3) 自然の研究方法

ゲーテは、自然の生成や生命の存在に関連する統一的法則性を根本現象 (*Urphaenomen*) ということばを用い表現した。これは、ゲーテの自然の考察や文学にとっても深い意義をもっている。純粹に自然科学的な関連を表わすための、また現実世界やある決まったジャンルに典型的なものを表すための、またある法則性を示すための手段であった。

植物学の領域における形態学 (*Metamorphose*) の理論は、自然観察分野でのゲーテのこの方法の適用がもたらしたものであった。メタモルフォーゼの法則に従って、あらゆる植物に典型的な成長過程を、精神により直観的に把握することによって、植物の本質として原植物の理念が生まれたのである。節のある葉の基本組織が拡張と収縮の交換過程において絶えず違った種類の愕の組織へ、花冠へ、花粉管へ、最終的には果実と種子へと変化し成長する。人間も含む動物は、またゲーテによれば、解剖学的構造の相違に従って、その生き方、住处、食料のそれによって条件づけられた共通の構造あるいは型の変形として捉えられる。そして、脊髄の変形の過程で脳を取り巻く頭蓋骨が、具体的に動物の形態となるに及び種が決定されるのである。

色彩論においては、根本現象の直観は光と闇との対立に基づいており、明暗を中心に眼が感ずる直接的感覚から色彩の本質と概念を説明する。眼に映ったものは事実であると同

時に理論でもある。例えば、青空は色彩論の基本法則を啓示している、と。地質学においては、斜面のわずかな亀裂、クレバスや採石場、鉱山の暗闇の地層や通洞を観察することによって変形の過程、川によってせき止められた跡を認識することができる。地質学者は、この観察という観点から、対象を精神における直観を支えとして研究する。

この直観を基礎にもつ根本現象が、ゲーテにおいては自然科学と詩的連想との間を区別する壁となることはなく、両者間をむしろ自由に飛翔することができた。「マグネットは根本現象であり、説明は終わっている、と言えさえすれば良い。それは、ことばも名前もいらない一切のものに対する象徴ともなっている。」⁽³¹⁾「マグネットの秘密を説明して欲しいといえ、愛憎以上の秘密はない」⁽³²⁾と。根本現象は説明の必要はない。ゲーテにとって根本現象とは、最終的に認識可能な理念であり、認識されたものとしての現実であり、象徴であった。「根本現象の背後に何も求めてはならない。根本現象そのものが理論である」⁽³³⁾と。根本現象は、形而上学者の抽象論と自然における物理学の機械論的仮定の両者に、共に、認識論的に普遍妥当性を有していたのである。

人間の感知能力に依存する根本現象へのゲーテの信頼と確信は、事物の認識において確固とした観点がない限り、科学的方法を採用させなかった。ゲーテは、人工的物理的分析方法に否定的であり、「顕微鏡や望遠鏡は本来的に純粋な人間の感覚を混乱させる」ものである、と考えた。「人間自身が、その健康な感覚を使う限りにおいては存在し得る最高に正確な装置である」⁽³⁴⁾と。実験により対象を分析することによって、事物の本質を把握することは不可能であり、そのことは「主体と客体との仲介」に役立つに過ぎない。ゲーテは、状況を量的というよりも、むしろ質的關係において規定しようとした。根本的な事象を純粋に量的、抽象的、かつ機械的で数学的に捉えようとする方法は、その関係領域に現れる現象を、感覚器官が質的に伝えようとするそれとは本質的に異なるものである。なぜならば、「経験的現象」は、科学的あるいは純粋な現象に還元することはできないからである。数学的価値とは、ゲーテにおいては仮定の基礎としての物理学よりも、むしろ抽象的思考の特殊な領域に果たす役割の方が大きかった。原因ではなく、現象が生ずる条件が重要であった。自然現象の説明や解明にあたって、物理的装置を用い分析することに反対し、直観に基づいて根本現象を把握することが重要であると考えたゲーテの思想は、自然研究者でも詩人でもある彼の基本的世界観の反映であり、人間と世界の本質についての認識においても妥当するものといえよう。自然を支配している関係を芸術家的視点から客観化しようとするとき、ゲーテは人間を中心に置き、認識能力の全体を働かせつつ、健康

な感覚の機能によって観察し、感じるままにその本質を解明しようとした。そしてこの認識の問題に対する最も根底には G. ブルノーとスピノーザの汎神論的哲学思想とのつながりを見て取ることができるのである。もし事物の本質がその関係と性質と同様に、生きている人間にも及ぶと考えられるならば、認識の客体と主体の結合は、主体の意識において客体の本質の現れを条件づけざるを得ないであろう。ゲーテの有名な次の詩は、ブルーノ的でもあると同時にスピノーザ思想を自己流に解釈したものといわれている。

目がもし太陽のようでなければ、
どうして光をみることができよう。
われわれの心に神みずからの力が宿っていなければ、
どうして神韻の気に心打たれることがあろう。⁽³⁵⁾

スピノーザにおいては、人間は存在の全包括的内容によって担われ、条件付けられたものとしてみなされ、その存在の永遠なる必然性から喜びと苦悩、知識と行動が生まれる。人間は存在を認識することにおいて、最大の義務と幸福を求めなければならず、理性的直観に基づいて感情が現実の基本的本質を与える。スピノーザの完全性の特徴はゲーテと同様、存在の概念に関して量的、質的關係において絶対的全体性と分かちがたく、現実の理念あるいは本質の把握と直視の可能性をも前提している。人間の力の影響は、感情、直観、思考の調和を引き出すことができるという確信、それは主観性の限界内において世界の本質を全体的にも個別的にも十分に認識、妥当させなければならないという認識論の最後の最も確かなものであった。そしてゲーテの根本現象についての見解は、思考と直観とを分かち難く結び付けた点において、認識論の領域における重要な業績といえるものあり、芸術的把握方法の本質を認識一般の規準にまで当てはめようと努力したものである。一連の因果関係を仲介として理性的に考えられた自然科学的認識は、自然と生命の現存在を前提し、主に感情的価値を追求する芸術的認識とは本来的に反対のものであったはずであるが、ゲーテは感情を有し、生きている主体の感知能力との直接的関連がある中に現実の因果関係を打ちたてようとしたのである。確かに、感覚的、精神的直観と形象や出来事の現れとしての自然との関係は、ゲーテにおいても科学的にはこれ以上考察されることはできなかったとしても、理論と仮定が現象と根本現象に基づいて、空間的、時間的、感覚的關係の中で形象化され、ここから規範と方向が得られるという方法論は存在したのである。こ

の中心的課題は、一連の直観的客体とその関係を必然的な段階的関連へと変えること、つまり系統的因果関係の下に整理し、最終的には基本的本質と法則のための接点を見出す作業であったといえよう。⁶⁹知的欲求は、哲学、自然科学において、形而上的あるいは経験的方向をとるにせよ、現実を知識の進歩に従いより詳細に解明しようとする。ゲーテの方法の本来的価値は、理論的、美学的認識が人間の本性に基づいて総合的に適用され、方法と結果の相違が大きくても共通性を考慮することによって、現実の全体的な見方をまとめ上げることにあった。19世紀の始めの3分の1、つまり、いまだゲーテの時代にあつては、物理的思想・思考と哲学的それとはそれぞれ、経済的、社会的、倫理的生活基盤において根拠を有するものであったし、両者はゲーテにおいては、同様の考察方法をもってしても矛盾するものではなかった。現実を詩的に表現する際もまた自然を科学的に考察する際にも、この間に特殊な力を使い分ける必要はなかった。精神の眼による直観が世界の本質的認識の尺度であり、普遍的真理を現象から捉える方法であった。認識の目的は、ゲーテにとって人間の世界と自然の世界に現れている生命の根本現象を直観的に把握することにあつたといえよう。そして、このことがゲーテに固有の自然科学的研究方法とその体系化である形態学への展開を導いたといえるのである。

（4）原植物、原動物の発見とメタモルフォーゼ

ゲーテの認識論は、自然についての理念の体系化を試みる自然哲学の域をでるものではなかった。つまり、芸術的認識と関連する自然的事象、感覚的、感情的人間の認識手段や組織と関連する物質的事象の理論的洞察であった。自然は、彼の眼にはまず实际的で外面的な証明を必要とする客体として映つたのである。ヴァイマルでの周囲の自然と係る実際の仕事は、彼のこうした性向にとって有利に働いた。地質学、植物学、動物学、観相学から解剖学、骨相学へ、鉱山学、化学、化学量論（Stoichiometrie）へとゲーテの関心と興味は拡大し、自然研究へと発展していった。

イタリアの本質を求めての旅行は、ゲーテに植物学の分野における重要な発展をもたらした。多くの未知の植物が、原植物についての新たな考察への切っかけを与えることになったのである。パドヴァで見た扇状ヤシの葉は、かねてからのゲーテの「考えをますます生き生き」とさせるものであった。「植物の全ての形態はひょっとして一つのものから展開したものかも知れない」と。ローマへの途中、「いかに自然がわけのわからない巨大なものを、最も単純なものから最も複雑なものを発展させたかについて、新たなすばらしい関

係を発見」できたと思じた。パレルモにおいては「植物の生殖と組織の秘密にますます近づく」ことができた。1887年10月にクネーベルに宛てた書簡は、これらイタリア旅行で得られた植物研究の成果とその確信を明らかにしている。「大きな道でも小さな道でも、私は植物学を研究した・・・私の発見した普遍的公式が全ての植物に適用できる、ということをもますます確信した」と。³⁷⁾

ゲーテにとっての主要な課題は、有機体の様々な発展の段階と形態が形成される形態変化 (Metamorphose) の法則を理論化することにあった。その際、ゲーテは機械的分析ではなく、精神の内面のうちに自由に発展した生命の根本的理念から出発しなければ、生命を直観することはできない、という信念を起点とした。³⁸⁾ 生命は、自然の発展にとって、また自然の形象化の科学的であると同時に詩的理解にとっての前提であった。ゲーテは物活論的 (hylozoistisch) な自然観を持って、カントの物質論 (Materie) とシェリングの世界精神論とは互いに対立する図式を持つ、とみていた。シェリングにとって、有機体の発展は概念的模範に基づくもので、あるジャンルの内的性質を現している。この理論は、ゲーテ以上に抽象的理念であった。シェリングは、磁石や電池などの新しい発見を手掛かりとして、自然全体を詩的に、芸術的に捉えなおそうとする自然哲学の思想を構築しようとしたが、それは、むしろ体系化というよりも混乱を導くことになった。確かに、ゲーテの有機的世界内の自然観察は、経験的研究の方法と方向においてシェリングと基本的に共通の思想も有していたが、それは、科学的公式に照らしても妥当する場合であり、文学的世界はある限られた問題に限定されたものである。いわば「創造しつつ生きている」自然が、研究し「体験する」³⁹⁾ 価値あるものであった。体験的なものの法則を抽象的に把握された型から演繹するのではなく、逆にある決まった型の活動の種類を経験的題材とそこで感覚的に捉えられた方法で告知されている発展の法則から読み取ること、これがゲーテの主張したことであった。従って、その自然科学的方法是、比較ではなく発展史的研究と呼ばれるべきものである。ジョルダナーノ・ブルーノのそれにも対応する自然に対するこうした物活論的見解は、次の詩にもはっきりと見て取られる。

「生命は全ての星にあり
星は他の星共々汝が選びし道を行く
地球の内部で力が脈打ち
われらを夜へ

また昼へといざなう」⁽⁴⁰⁾

ゲーテは芸術家的精神において、自然とそれがもつ力を畏怖していた。ゲーテが生命や生命現象に焦がれた根源は、すでにシュトラースブルク時代に、自然の物質論的組織を「灰色の、まがいもの的で、死のようなものだ」と考えたところに遡って求められる。ゲーテがファウストのおぼろげな輪郭を描き、ヴェルターを書き綴ったこの時期は、彼にとって、生は何か捉え所のないもの、不明瞭なもの、無気味なものとなり、自然のうちにあるはかり知れない力を永遠にむさぼり、反芻する怪物とも思われたのである。しかし、また一方、自然はゲーテに生き生きとした生命の息吹を伝えるものでもあった。Tiefurter Journal で、次のように述べている。「自然は永遠の新しい形態を創造し・・・全ては新しく、しかしまた古い・・・その創造物のそれぞれは独自の性質をもち、その現れのそれぞれは個別の概念をもつが、全てにして一である・・・全ては常に自然の中に存在する。過去も未来も知らない。現在が永遠である。・・・自然は完全ではあるが、常に未完成である。それに従い独自の形態をしている。それは何千の名前や項目の中に隠れ、常に同じである。」⁽⁴¹⁾

自然科学に対する関心と知識欲が増していく80年代の前半、ゲーテにとってスピノーザの『エチカ』がこの分野で大きな影響を持った。ゲーテは、そこに神により条件付けられた存在は完全である、という確信を読み取るとともに、ここで展開されている存在論的汎神論を自己流に解釈し直すことによって、生成的汎神論へと深化させ、発展の性格を世界の中で絶えず生き延びる神の真性の特質として認めようとした。ゲーテにとってスピノーザの全体に対する個の関係は、空想の入る余地のない数学的な前提によってのみ方向付けられるという点において意味をもった。個人が有限の限定されている自己を条件付けるための抽象的概念は、全能の神による精神の統一的な直観的観念へと変えられなければならない。このことは、神の存在の無限の内容を、有限の個人的な形態に相応しい生成過程へと移すものに他ならない。自然の中の神も、この直観によって正常なものも異常と見えるものをも支配し、永遠の時間の合法則性のうちに現れるのである。スピノーザによれば、自然に誤りはない。なぜならば、それは常に同一であり、至る所一つであり、その力と活動も同一であり、法則に基づいて全てが生まれ、形態が次から次へと変化する。法則と規則は、至る所常に一致する。ゲーテのことばによれば、「全ては単純なメタモルフォーゼの法則に従って起こる。その作用によって対称的なものも、奇異なものも、実りあるものも、実りなきものも、理解できるものも、できないものも眼前にもたらされるのである」

と。⁴²スピノーザと同様ゲーテにとっても、認識の真理は偶然の感覚的な感知にも、普遍的なジャンルと特性の抽象化にもあるのではなく、事物に普遍的な影響から特定の側面の影響の直接的現れを読み取る能力のうちにあった。神に対する自然のこのような関係を前提することによって、現存在と完全性との概念が一致し得るのである。ゲーテは、スピノーザにおいて、生きた力とその力が作用する要素とが一つのものとして捉えられているのを見た。そして経験的でも形而上的でもなく、あるいはその両方でもあるかも知れない自然認識の方法を、ゲーテは、自然と芸術との有機的統合の象徴として知の最高の段階の有り様を示すものとみなしたのである。

しかしながら、1786年ゲーテが、ヤコービに宛てた書簡に「認識の範囲を考えず、生涯、十分な理念を創造できる事物の観察に身を捧げよう」⁴³と書いたことは、スピノーザの『エチカ』に同意しつつも、独自の自然認識の方向を模索する姿勢も明らかにしている。つまり、ゲーテの自然認識には発展史的思想が含まれ、この点においてスピノーザのそれとは基本的に相違する。

「創造物を再創造し、
硬直化を防ぐことは、
永遠なる生きる行為である。
かつてなかった物が、今や
純粹なる太陽となり、色づく大地となる；
いかなる場合も留まることなし。
動きやまず、創造しつつ行動する、
始めに形成され、変化する；
瞬時留まり見えるのみ」⁴⁴

一方、スピノーザの場合、個は無条件に全体に依存し、能産的自然の性格は、神の中における事物の永遠の上昇を明確にする。ゲーテの統一と無限性とは、個の本質の存在を締め出すというよりも、むしろ含むものであり、本質によって条件付けられるという点でスピノーザのそれとは異なる。この延長上にライプニッツのモナドとの関連もまた生まれてくる。「私は全ての存在の最終的な構成の段階とその秩序づけを考えている、・・・それらを私は魂と呼びたい。というのもそれらから全体の魂が生まれるからである。あるいはむ

しろモノイドといわれるものが。・・・これらは小さく、力なくただ身分相応に奉仕するものもあれば・・・また一方大きく強いものもある・・・この後者は自分たちを養ってくれた殻を引き破り、相応しい形に、肉体、植物、動物へと変化する・・・ここから蟻のモノイド、蟻の魂のような、世界のモノイド、世界の魂が生まれ、両者は完全には一致しないが、その根本において原形と関連を有するのである」と。⁴⁵⁾

ともあれ、ゲーテの精神における直観的自然認識は三つの段階に分けられる。自然科学的というよりも詩的で芸術的な物活論的な思想、イタリア滞在中に獲得された観察によるメタモルフォーゼの理論、そして最後に精神と自然との両世界を結び付ける形而上的基礎付けのためのモノイド論。これらは、固有の法則、ある決められたジャンルあるいは発展との関連において、自然の領域の内部に特徴的形態を基礎としてもつものであり、この意味で自然の根本的統一は自然の多様性にかかわりなく、全体の体験にそった関係のうちに証明されるべきものであったといえよう。

ところで、この自然認識をもたらす直観の内実を、ゲーテは「自然の二大動輪」と呼び、後に自然に関する「分極性と上昇」(Polarität und Steigerung)の理論へと発展させる。これらの概念は、カントの「吸引力と反発力は物質の本質である」という思想に負うところが多く、ゲーテは自然全体の無限の多様性の中にある本質を現す「分極性の根本」(Urpolarität)というものを特に措定した。これに基づいて、相対立する二つの性質あるいは傾向の交換作用として根本現象の思想が生まれ、ゲーテの自然認識の方法論が確立されていくのである。この理論は色彩論における明暗などの無機物のみならず、収縮と拡張の交替による植物の成長などの有機体にも、また「愛は高められたもの」⁴⁶⁾であり、「人間は絶えず上昇する自然の最後の産物である」⁴⁷⁾などと考える美的、道徳的世界にも適用された。その際、ここには、完全なるものはその性質を越え、何か別のもの、比較できないものなどより高い目標に向かうという上昇の原則が存在する。そして、このような上昇の過程が人間の眼に映るとき、それは形態変化(Metamorphose)となる。ある自然の種に特有の形成衝動が、外的要素の影響を受けながら交替作用をくり返し生成へと導き、物質的にも精神的にもますます高度な総合的生命体あるいは形態へともたすすのである。

(5) むすび

ゲーテにとって、自然と芸術の本質とは一致するものであり、一つの原理に基づいている。すでに若き頃、1780年の論文において自然を唯一の芸術家に喩え、「最も単純な素材

を最高の対照物に、最高の完成物へ、最高の精確さへと苦もなくいとも簡単に変えてしまう」⁴⁸と語った通りに、原型は自然の営みの基礎となっているものでもあり、また芸術的に表現されて形態を変えているものでもある。このように自然の形態の中に、同時に芸術的なものを認めようとする姿勢は、動物の種を特徴付ける方法に応用した観相学研究にも言及されている。後に、美と芸術形式について「美とは、それが現れなかったならば私たちに永遠に隠されたままの、密かな自然の摂理の宣言である」⁴⁹と述べたが、まさに生物が活動と完全さにおいてその最高の状況にあるとき、私たちにその美は直観されるのである。ゲーテは、パルテノン神殿の装飾にある馬の頭の彫刻について、その高貴な像は力強く無気味であたかも自然に逆らって造られているようであるが、本来その原型を創造したのは芸術家である。「芸術家は眼でいかに見、精神でいかに捉えたにせよ、私たちに、その高貴な創造物は、少なくとも最高の詩性と芸術の感覚において表現されているように思われる」⁵⁰と述べた。芸術作品は完全に個性的な形象として眼前に現われたとしても、両者の表現される理念は同じである。事物の本質を考察するこの基本認識に加え、目で見ることができる姿においても把握する方法こそ、ゲーテの自然及び芸術に対する特徴的な認識方法に他ならなかった。

思想的直観的観念である精神の眼には、科学的なものまでが明瞭になるという基本的図式もまた芸術のそれと同じ原理に由来するものである。「自然が秘密をあかそうとした者は、その最もふさわしい解釈者、つまり芸術への止みがたき憧れを覚えるであろう」⁵¹と。自然と芸術は、ゲーテにとっては根本的には世界を支配している力による、同じ事物のそれぞれの現れに過ぎなかった。その力は、被造物をより高く完全なものへと発展させ、形なきものに生きた形を与え、固有の形成衝動へ、分裂から統合へと導く創造力であり、人間は上昇の最高段階に到達し、自然の中の頂点である完全さと徳を備え、いわば至高の存在となる。これは自然の真理と法則に基づく必然性の結果であり、神と同等である。ちょうどオリンポスのジュピターのように「人間を神へと高めるために、神は人間となった」⁵²のである。このような自然の営みの過程において、人間から芸術家が、芸術家から理念的な自然の型が、つまり芸術作品が生まれる。この創造と展開の原理は、自然界と生物学的なものあるいは精神的なものとの間の相互理解を可能なものとするのである。このことはまた、ゲーテにおける有機体の本質論の中核をなすものであった。表面的現象は内的な形成原理に支配される、という概念はすでにアリストテレスに始まり、この時代 K.G. カールスによって改めて主張されたが、ゲーテは、「固有であるものによって自己のものとなすこ

となしには、いかなるものも受け入れない、というエンテレヒー」⁵³⁾の思想を付加し、この原理に新たな息吹と内容を盛り込み、同時代に生きたものとすることができた。それは、「己の回りを回転するモナスの動きであり、生命」⁵⁴⁾であり、これによって個別的な事物は無限に世界の生命・生成活動に参加しているのである。そしてそれはまた根本現象と同様に、感覚的に直接把握されるのではなく、精神の直観により把握されるものであった。

思弁的能力よりも体験、経験から知り得た事実を、同時代の思想を拠り所として発展させて行く能力に優れたゲーテは、自然の観察による自然科学研究においてより多くの、しかも独自の成果をあげることができた。ゲーテにおいては、自然と最高の有機的生命体である人間を頂点とする生物とは、互いに対立あるいは区別される存在ではなく、精神を媒介として一体のものとして把握された。そして、全体から個別的な部分、分枝というものを推測することによって事物の本質を追究し、この帰納的方法によって根本現象を突き止め、独自の形態変化の法則を確立したことは、現代にも生きるゲーテの業績である。たとえば、今日ゲーテが提起した科学的法則の大部分が普遍妥当性を有するものではないとしても、しかしながら、18世紀以来の自然科学が人間の存在に脅威をもたらす原因となるたびに、形態学はその方法論において、批判的反省の根拠として脚光を浴び、時代の新たな内容を盛られ再受容され、先取的思想の一部を担ってきた。

このことはまた、自然と芸術とが同じ原理の下で創造される、と考える汎神論的思想にゲーテが深く傾倒していたことも与って力があつた。自然とその模倣としての芸術ではなく、根本的には両者とも自然によって産み出された創造物であり、その現れにおいて形態を変えたに過ぎない。形態学は、こうした前提をもとに全体から部分を、観察と精神の直観により帰納的に考察することの結果から生まれたものである。

ゲーテの自然研究は、肉体と精神が一体のものであると同様に、自己の芸術的創造力と矛盾するものではなかった。精神を媒介として自然を直観的・総合的に認識するとき、それはすでに芸術的現れをも含むものであった。自然環境が生物全体の生存にいかに重要であるか、が人類共通の認識となって久しい今日、ゲーテの自然認識の方法論の特異性を彼個人の精神のそれにのみ帰するのではなく、生態学的意義をもそこに見出そうという試みも、あながち不当なことばかりとはいえないであろう。

(注)

- (1) Johann Wolfgang Goethe, Hempelsche Ausgabe. Bd.34, S.93. (以下, HA 巻, 頁と略記)
- (2) Johann Wolfgang Goethe, Muenchner Ausgabe, Bd.8・1, S.13.
- (3) Th. Carlyles ausgewaehlte Schriften. Deutsch v. Kretzschmar, Leipzig 1885, 1, S.56.
- (4) Goethes Werke, hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie v. Sachsen, IV.Ab., 37 Bd., S.278-283.
- (5) Muenchner Ausgabe, Bd.19. S.39.
- (6) HA 27, 351.
- (7) HA 33, 89.
- (8) Muenchner Ausgabe, Bd.8・1, S.13f.
- (9) HA 34, 104.
- (10) HA 13, 104.
- (11) HA 33, 470.
- (12) HA 34, 129.
- (13) HA 34, 47.
- (14) HA 34, 120.
- (15) Unterhaltungen mit dem Kanzler Fri. Mueller, hrsg. v. Burkhardt. 2.Aufl. S.193.
- (16) HA 34, 98f.
- (17) ebda.
- (18) HA 34, 147.
- (19) Hermann Siebeck, Goethe als Denker, Stuttgart 1922, S.29.
- (20) Johann Wolfgang Goethe, Weimarer Ausgabe, II, 11, S.162.
- (21) H.Siebeck, a.a.O., S.36.
- (22) HA 35, 275f.
- (23) HA 19, 198.
- (24) HA 34, 143f, 148.
- (25) HA 34, 146f.
- (26) HA 23, 18.
- (27) ebda.

- (28) HA 27, 10.
- (29) HA 19, 196.
- (30) HA 27, 311.
- (31) HA 19, 172f.
- (32) HA 2, 317.
- (33) HA 19, 198.
- (34) HA 19, 26. u. 186.
- (35) HA 2, 364.
- (36) H. Siebeck, a.a.O., S.59.
- (37) Zit., n., Siebeck, S.64.
- (38) Rudolf Steiner, Die naturwissenschaftlichen Studien. (Kurschners deutsche National-literatur, Band 114-117) I, S.423.
- (39) HA 34, 71f.
- (40) HA 2, 394.
- (41) HA 34, 71f.
- (42) HA 33, 164f.
- (43) Jacobi 宛, 1786
- (44) HA 2, 226.
- (45) Goethes Gespraechе, hrsg. v. Frl.v.Biedermann, 1863, 3, S.63f.
- (46) Goethesjahrbuch X I, S.137.
- (47) Goethes Gespraechе, a.a.O., 2, S.263
- (48) HA 34, 71.
- (49) HA 19, 51. u. 153.
- (50) Strassburger Goethevortraege (Strassburg 1899), S.139.
- (51) HA 19, 51. u. 153.
- (52) HA 28, 203.
- (53) HA 19, 81.
- (54) R.Steiner, a.a.O., I, 177.

(1996年 5 月21日受理)